

歌唱の際の日本語の発音について

水谷知久

I 序 論

優秀な設計に依つて優秀な技術者が建築した住宅に居住する者は、安心して快適な生活をする事が出来る。設計がまずい場合、建築技術がまずい場合、何れにしても安心して住む事は出来ない。音楽に於ては設計家は作曲家であり、建築工は演奏家であり、居住者は音楽を鑑賞する聴衆である。如何に優秀な演奏家に依つて演奏されても、曲そのものが拙劣な作曲であつた場合には聴衆に感動を与える事は出来ない。同様に如何に優秀な曲でも未熟な演奏家に依つて演奏されればその価値は激減する。

日本語で歌われる歌曲を二つに大別する事が出来る。その一は日本語の詩に作曲された歌曲であり、その二は外国語に作曲された曲の歌詞を日本語に訳詩した場合である。

日本人の作つた歌曲はつまらない。外国の歌曲は原語で歌うに限ると一部の音楽家及びインテリ聴衆は言う。場合によつては「全くその通り」と共感したい事もあるが、しかし作曲・歌詞・歌唱共に優秀な場合には此の言は通用しない。

詩の詩感を十分に伝えて、しかも音楽として立派な曲を作ること、原詩の詩感をそこなわなで、しかもその音楽によく調和して、日本語の詩としてもふさわしい訳詞をすること、共に頗る難かしい事である。如何に作曲するか？ 如何に訳詩するか？ を論ずる事は非常に重要であるが、今回は一応この事にはふれなで、既に作り上げられた作品を演奏する場合のみに限つて論ずる事にする。即ち演奏である。声楽の演奏は歌唱であるが、此の歌唱の中特に日本語の発音に重点を置いて論ずる事にする。

II 日本語の特質

日本語も他の諸国語と同様に言葉 (words) の音声学的組織を生理的に

区分して音節 (syllables) とすることが出来る。音節には「pa」「ka」のように母音に終る開音節と「ap」「ak」のように子音で終る閉音節とがあるが、日本語では文字の上での閉音節は存在しない。他の諸国語に於ては此の両種の音節が同程度に存在し得るけれども、日本語に於ては、音節の殆ど全部は開音節で一般の日本人の言語心理に於ては閉音節は全く存在しないものと考えられている。日本人が「ap」なる閉音節を模倣しようとすると、「p」なる子音の後に母音の中で最も控え目な母音「ウ」を添加して「apuu」の様に発音し勝ちである。日本人が外国語を発音した際にその国の人の耳に最も異様に感じるのは、この閉音節を開音節の如く発音するからであると言われている。此の原因は日本の従来の音標文字であつた仮名の中に閉音節を示す文字がなかつた事に帰する。音節を表示して(開音節のみではあるが、) 個々の単音を表示しない仮名文字に頼つてはいけない。此の事は外国語を発音する際に必要であるばかりではなく、日本語そのものを正しく表示する際にも必要である。……であります。……の有りますは arimasu で有つて arimasu と発音するのは特殊な地方の方言である。之はほんの一例であるが実際に例をあげると枚挙にいとまが無い程存在する。

日本語の母音は通常ア・エ・イ・オ・ウの五つだとされている。イ (i) とエ (e) が前母音「front vowels」でウ (u) ・オ (o) ・ア (a) が後母音 (back vowels) である、之等の母音中ウ (u) 以外のものは他の諸国語中に之に相当するものがある。「u」は他の諸国語に於ける「u」がその発音の際唇が円くなつて前方に突き出されると異り、僅かばかりの唇の運動を伴うのみである。日本語の「ウ」(u) は他の母音に比して「きこえ」が少い為に時としては(特にアクセントを持たない位置にある時) 消失する傾向がある。併しドイツ語やフランス語に於ける「u」は唇の運動が極めて重大な意義を有し日本語の「ウ」の如く簡略には扱われない。母音の無声化と言う問題があるが、日本語では「ウ」が無声化される事が最も多い。次に「イ」と「エ」が区別されて発音される事がのぞましい。日本の或る地方ではこの両者が全く区別されていないが「i」は「e」と異

り、舌が著しく上に高められた際、きつぱりと発音されるのだと云うことを記憶しておくべきである。

日本語には他の諸国語に於けると同様に母音に長短の区別がある。日本語では此の母音の長短が言葉の区別的手段となり得るから、歌曲の作曲及び歌唱の際この事を充分留意しないと全然別な言葉に聞える場合が存在する。外 (soto) ・ 壮図 (so:to) ・ 粗糖 (soto:) ・ 相当 (so:to:) の区別の如きがそれである。

フランス語に於ては重母音は融合して単音化してしまっているが、日本語には存在する。しかし日本語に於ても母音の重出を嫌う特質があり古来漸次単音化しつつある。

長息 (ながいき) → 歎 (なげき)。

淡海 (あほうみ) → 近江 (あふみ) → (おーみ)。

河内 (かはうち) → (かふち) → かわち。

持ち上ぐ (もちあぐ) → (もたぐ)。等

(以下 a, u は日本語のア・ウを示すとの了解の下に a, u の代りに a, u を用いる。)

斯様に母音の重出を嫌う日本語へ重母音の多い支那語—漢音・呉音—がはいつて来た時w等を入れて避けていた。例えば「芭蕉」をバセオの代りにバセヲ (basewo) としたり、「紅梅」をコオバイの代りにコヲバイと言つたりしていた。しかし母音の重出でも口を大きく開く方の母音が先に立つて口を小さく開く母音が後に来る場合は比較的らくに出来、その反対の場合がむずかしかつた。即ちアイ・アウ・オウ・オイ・エイ等は、らくな方でイア・イオ・イエ・ウア・ウエはむずかしくて、ya・yo・ye・wa・wo・we の如くでないと言えないと言う傾向があつた。そこで、やさしい方は漢語で母音の重出が続々と現われた。アイ (愛) ・ カイ (皆) ・ タイ (泰、大) ・ サイ (細) アウ (桜、央) ・ カウ (高、孝、行) キャウ (京、郷) 等。

斯様な重母音は純粹の日本語には無かつたもので、漢語の輸入によつて我が国に発生した新しい音形式であり、推古朝以来益々知識層に滲透し、

大化の改新以後一層漢音が重んぜられ遂に純日本語にも重母音が生じて来た。即ちイ音便・ウ音便である。

書きて→書いて

きさき(后)→きさい

髪搔き(かみかき)→かうがい

仕へまつる→仕うまつる等。

しかし「かうがい」が更に「ko:gai」と発音される様になつたと同様にアウ・カウ・サウ等の語がオー・コー・ソーの様に発音される様になり、エウはヨーに、イウはユーにと変遷し、古来の重母音を嫌う傾向が復活している。現代語に於て、程度・兵隊などテイド・ヘイタイが東京語ではテエド・ヘエタイ(テード・ヘータイ)とテ及びへの長音の様に発音されている。以上日本語の母音の発音を文字及び記号で表現出来る範囲内で述べたが、実際に我々が日常使用している日本語に於ては母音の「ア」一つだけでも随分種々の「ア」の発音が有つて到底音標文字だけでは表現出来ない。青空(アオゾラ)と発音する時の「ア」と秋空(アキゾラ)と発音する時の「ア」とを比較して見ると外観の口形だけでも相当異つている事がわかる。此の細部については後章で述べる。此処では母音は単なるアエイオウの5種類では無い事だけを述べて置く。

次に日本語の子音の発音は万国音標文字で表現出来るが日本の仮名文字だけでは表現出来ない。ti を表現する仮名は無い。又 va・fa 等もヴァ・ファ等では正しく表現出来ない。50音図の中、表現に無理のある箇所が相当ある。サ行は「sa, si, su, se, so」を表現し別のシャ行のイ列音にシ「shi」が含まれるべきである。タ行は「ta, ti, tu, te, to」を表現し、別のチャ行のイ列音にチ「chi」が含まれ、更に別のツァ行のウ列音にツ「tsu」が含まれるべきである。ハ行の他にファ行を設け、fu を表現し、更にパ行を清音の中に加えるべきである。元来は現在のハヒフヘホをバビブベボと発音したのである。pa→pfa→fa→pha→haと変化して来たのであるから真実はハヒフヘホを pa, pi, pu, pe, po と発音しその濁音がバビブベボであるべき筈である。ハヒフヘホの濁音がバビブベボであるのは奇妙で

あるし、パピブペボを半濁音と言うのは絶対誤りである。ヤ行は「ja, j, ju, je, jo」を表現し、ワ行は「wa, wi, w, we, wo」を表現する様にすれば表現能力は豊富になるが、母音が無声化された言葉を表現する為には母音を伴った音のみを表現する仮名文字だけでは足りない。何れにしても仮名文字の数を少し位増しても音標文字にはなり得ないから日本語の歌曲の楽譜の音符の下に仮名文字で歌詞を記していても、その仮名をたどって発音すると日本語らしくない日本語になってしまう。例えば小学一年の唱歌曲「オウマ」の歌詞「オウマノオヤコハを o u ma no o ja ko ha と発音すれば随分奇妙な日本語になる。o m ma no o ja ko wa と発音すべきである。之は「オウマ」を「オンマ」と発音する例であるが、仮名文字で「ン」と記す語の発音は数種類ある。何れも口音に対して鼻音と言われるが、此の鼻音を発音に使用する器官に依り、唇内鼻音 (m) ・舌内鼻音 (n) ・喉内鼻音 (ŋN) に分ける。

唇内鼻音 (m) ……せんべい (煎餅) ・けんぶつ (見物) ・でんぼう (電報) ・さんま (秋刀魚) 等の「ん」。

舌内鼻音 (n) ……かんな・ぜんと (前途) かんり (管理) ・せんりん 等の「ん」。

喉内鼻音 (ŋ) ……後舌面の中程を高く隆起させて軟口蓋の中程に押しあて氣息の通路を密閉して声を鼻から漏らして発音する音で、だんご・なんぎ・さんがい・でんき等の「ん」。

喉内鼻音 (N) ……ŋ と似ているが N の方は後舌面が軟口蓋に密着せず少し隙間を残して発音される。でんわ・ほんやく・ほんそう・ほんあん等の「ん」。

其の子音……口音の中母音以外の音が子音である。母音と合して諸種の音を作るのであるから子音と云う名称よりも父音と言う方が適している。此の意見は今から50数年前に岡倉由三郎氏がその著、発音学講話で発表して居られる。

r ……日本語のラ行はr と l との間なので日本人が外国語の発音をする場合 r と l を混同し易い。有声破裂音の一種である。

dz……東京では「ず」も、「づ」も共にその子音にこの音を用いる。

z……「ざ」「ぜ」「ぞ」の子音として現われるが、「ず」も「づ」も共に此の子音で発音する地方もある。

dz₃……東京では「じ」「ぢ」の子音として現われる。

z₃……東京では用いないが「じ」「ぢ」の子音として用いる地方がある。

dz・z・dz₃・z₃の4つを日本人は殆ど意識的に区別していない。「s」の有声音は「z」であるが日本の方言の大多数に於ては此の「z」の前に密閉音「d」が先行して子音の密接な結合「dz」を形成する。「dz」の様な種類の音は摩擦音の中でも特に閉擦音と言われる。一般の日本人は摩擦音と閉擦音の区別を自覚していないので「z」の代りに「dz」を用いる事が多い。例えばドイツ語の*sehr* (ze:r) とフランス語の*zèle* (ze:l) とを日本人は全く同様に (dze:ru) と言うように発音し勝ちである。

日本語には唇的摩擦音もある。例えば「ワ」「ヲ」及び「フ」の音節の始めの音の如きものである。ワ・ヲは上下の唇を狭める事により形成され、英語の *w* に似ている。ただ日本語では英語の *w* 程には著しく狭めないで全く消えてしまう傾向がある。例えば「戸ヲ」が「to:」になる如きである。「フ」は *w* に対する無声音で英語の *what*・*when* 等 *wh* で始まる言葉の *wh* に相当する音である。日本語のこの音は英語のそれが他の音との結合によつて現わされるのに反して独立の意義を有し、且つ一層強いので別な文字 F を以て示す。即ち *w* は有声両唇的摩擦音であり F はその無声音である。

F……フカイ(深い)・フタツ(2つ)等の語に於て「フ」の子音がこの音で発音される事がある。

h……喉的摩擦音で、はは(母)・はる(春)などの語に於ける「は」の子音が之である。この音は無声である場合が多く、之に相当する音はドイツ語及び英語には存在するがロシア語には全く見出されない。フランス語では独立した音としては存在しないが、母音との間にあつて、一方から他への「わたり」としては生じる。

註……日本語に於ける「わたり」の例は顔 (kawo) に於ける「w」、家 (ije) に於ける「j」の如きものである。

ㄱ……東京でヒト (人) ・ヒビヤ (日比谷) などの語に於ける「ヒ」がこの音で発音される事がある。ドイツ語の Ich の ch の発音であるからこの音字の名称はドイツ語の Ich から取つて Ichlaut と言う。

次に日本語には母音を含まない音節が存在する。

(i) 促音……喫茶 (ki-s-sa)、雑誌 (za-じ-じ)、切手 (ki-t-te)、合致 (ga-t-tji)、学課 (ga-k-ka) の促音の部分が次の音節のはじめの子音と同一の音でありながら一音節をなすのである。即ちこの促音の部分は子音一つでありながら他の音節を発音する場合と時間上同じ長さで発音される。

(ii) 撥音……とんぼ (tom-bo)、今度 (ko-n-do)、電気 (de-g-ki)、電話 (de-n-wa) などの撥音の部分が一音節をなしている。

促音に対しては休符を与え撥音に対してもなるべく時価の少い短い音符を与える方がよい。前の音節の音符の中に包括された方がよい場合が多い。次に日本語の子音の一覧表を掲げる。

第一図

	鼻 音		口 音								
			破裂音		摩擦音		破擦音				
	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	
両唇音			m	p	b	F	w				
歯 音			n	t	dr	sf	z ₃	ts tʃ	dz dʒ		
硬口蓋音						ç	j				
軟口蓋音			ŋ	k	g						
声門音						h					

呼吸は声門を通過する際に、その時の声門の状態に応じて諸種の声となる。

1. 声門広開……

呼吸・吸気が自由に通過する。

……無音。

2. 声門半開……

呼吸の力強い時

にその呼吸を拒絶する。……摩擦音

3. 適 当 開……声門の閉鎖力と呼吸力とが調和した場合。……声。

4. 全 閉……呼吸を遮断する。……無音。

5. 閉鎖声門の打開……破裂音及び破擦音を生じる。

日本語の特質について猶アクセントの問題や、音節の「つながり」の間

題等多く有るが、之等は主として作曲、或は訳詞の際考慮すべき事で既に出来上つている歌曲を歌唱する場合には関係が少いので今回は之を省き、次に具体的な歌唱の際の発音技術の問題にはいる事にする。

III 歌唱の際の日本語の発音

仮名、或は音標文字での音の表現には限度がある。同じ文字で表現していても実際の発音は、その音の前後の音の関係、長さ、高さ等で異つてくる。どの様な相違が有るか、相違の生じる理由等を検討する事にする。

試みに上唇と下唇との間の距離の変化を調べて見る。私が山田耕筈氏作曲「からたちの花」を普通の声量で歌つた場合の上唇と下唇との距離を計つて見るとはぼ次の様になる。

か	ら	た	ち	の	は	な	が	さ	い
2.5cm	3.5	2.2	1.5	1.5	3.0	4.0	2.5	2.2	1.8
た	よ。	し	ろ	い	し	ろ	い	は	な
2.5	1.8	1.6	1.6	1.8	1.6	2.2	2.0	3.0	4.6
が	さ	い	た	よ。					
2.6	2.8	2.2	2.5	2.2					

之を楽譜の下に棒グラフで示すと次の様になる。

第=図
Andante tranquillamente [M.M. ♩ = 56]

Ka - ra - ta - chi no ha - na ga sa - i - ta yo.

Shi - ro - i shi - ro - i ha - na ga sa - i - ta yo.

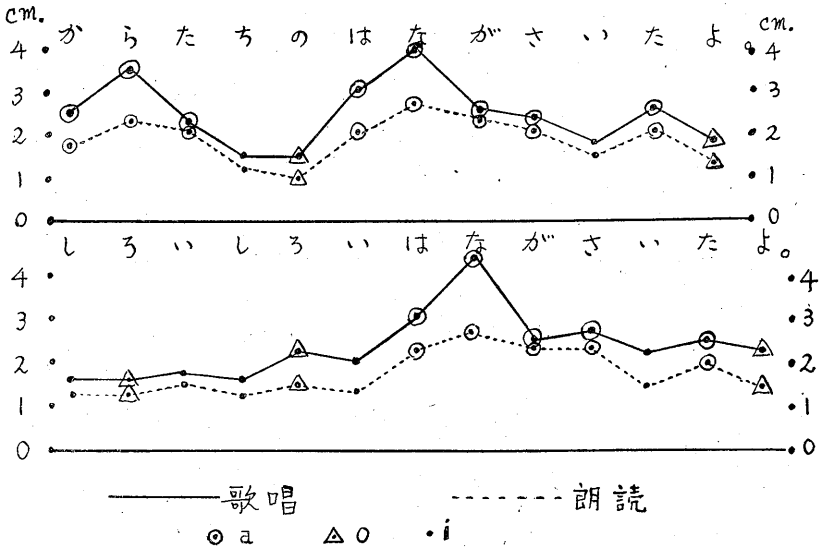
私個人の考えで歌つたのであるから絶対的な基準であるとは言い切れ
ないが、私としては良心的に日本語が良くわかる様に、しかも楽譜に示され
ている expression に忠実に歌つたつもりである。若し歌唱でなく、詩の朗
読であつた場合の唇の距離はどうか？

次からたちの花を朗読した場合の両唇の大体の距離を計つてみると次
の様になる。

か	ら	た	ち	の	は	な	が	さ	い
1.8cm	2.2	2.0	1.2	1.0	2.0	2.6	2.2	2.0	1.5
た	よ。	し	ろ	い	し	ろ	い	は	な
2.0	1.3	1.2	1.2	1.5	1.2	1.5	1.4	2.2	2.7
が	さ	い	た	よ。					
2.3	2.3	1.5	2.0	1.5					

歌唱の場合と朗読の場合と、どのような差異が有るかをグラフで比較して
みる事にする。

第三図



歌唱の線と朗読の線とは平行線を為している。「ア」音の場合歌唱と朗
読の差の大きい個所は音の高い個所である。「イ」及び「オ」の場合は、

音の高低にかかわらず一般に差が少い。此の例には「エ」「ウ」が無いが、「イ」及び「ウ」と大差ないものと考えて良い。「ア」の口の開きの大きい個所は先づ第一に音の高い所であると言える。此の事は他の母音についても言い得る事かも知れないが此の図表に表現されている他の母音は必ずしも高い音の時に口を大きく開いているとは限らない。之は他の条件に依る。他の条件とは何か？ その母音をはさんでいる子音を発声する為に必要な口形の影響である。勿論この条件は「ア」の場合にもあてはまる。先づ「イ」の各音を比較してみる事にする。「からたち」の「ち」は*h'*、次の「さいたよ」の「い」は*a'*で一音低いが口の開きは後者の方が僅か広い。*chi*を発音する際の*ch*は歯間を閉じて発音する。次の*n*の発音の際も舌端を上前歯の裏に付けなくてはならないから大きくは開けない。結局「ち」の*i*は口を余り開けない音にはさまれている。後者の「さいたよ」の「い」は*a*と*t*とはさまれている。此の*t*もすぐ*a*に連る為に軽く舌端を歯に触れる程度であまり口をせばめないで発音する。直ぐ前の母音が*a*であり、次の母音も*a*であるから、*ta*の*t*で少しはせばまるが少くとも前者即ち「からたち」の「ち」よりは、ずつと開きの大きい音にはさまれている事になるから音は一音低いが開きは大きくなる訳である。次に「しろいしろい」の最後の「い」の開きが大きいのは、すぐ前の「ろ」の*o*が半開である上にすぐ後に*ha*と最も広く開き得る音が続くから他の「い」よりも広く開く。「さいた」が2度あるが、後の「さいた」の方が広く開いているのは音が一音高い事も理由だが音符の上に示されたテヌート[-]の記号にも依る。

次に「オ」であるが「からたちの」の「の」と「さいたよ」の「よ」とは共に*h'*で同音であるが後の「よ」の方が時価が長い。前のは八分音符で後のは二分音符であるが、前の「の」は上行旋律の前に存在して之から盛り上つて行く所であるのに反し後の「よ」は段落で停止の寸前であるから時価が4倍になつた程には広く開かれなくて少し広い程度である。2度目の「さいたよ」の「よ」は*d''*で短3度高いので前の「よ」よりも広い。「しろいしろい」の「ろ」は後の方が音は一音高いので広いのは当然だ

が、更に前の「ろ」はㄨであるのに対し、後者はレガートに歌う為に一層その差を大きくしている。猶此のグラフには示す事が出来なかつたが、実際は1つの音符を長く歌っている場合に *crescendo decrescendo* に伴つて口の開きが広くなつたり狭くなつたりする。音量を多くする為には幾分口の開きが大きくなる。

以上の諸点を総合すると口の開きの広い場合は次の様な条件に依る事になる。

1. 音が高い場合。
2. 音量が多い場合。
3. 音が長い場合。
4. その音の前後の母音又は子音が口を開いて発音する音である場合。

上述の様に同じ母音でも状況に依り口の開きが異なる。「ア」の場合は上の門歯と下の門歯の間に指が縦に2本はいる程度開きなさい。「オ」の場合は1本でよろしい等、従来口型図等で決められていたが、此の様に型にはまつた歌い方をすれば、実に味気ない日本語の歌が生れる。従来論法とは逆に結論を先に述べてしまつたが、この結論を裏づける為声の発声の状態から述べる事にする。

声門の広さは人種に依つて異つてゐるので、従つて発声の相違も起つて来る。以下暫く「鷲尾猛氏著の「フランス語発音講話」より抄録する。

『P, 30 発声の種々相、

フランス人の声門は比較的狭いので直ちに発声状態に入り得るのに対してドイツ人の声門は広いので直ちに発声状態に入り得ず、従つて声の前に声門摩擦音を伴うか、或は力を入れて声門を閉ざしてしまひ之を打開しつゝ発音する為声門爆音を伴う事になる。之を佐久間博士の言葉に従えば「こたえて」の緩急と言う事になる。……筆者註……佐久間鼎著、日本音声学……また逆に声をとめる時にも、フランス人の、なだらかに止るが、ドイツ人はポツと止まる。之は「こえどめ」の差である。』

上述の如く人種に依つて発声器官に差異が有ると同様に同じ人種でも各人顔の異なると同様に発声器官に差異が有る筈である。実際各個人が最も自分に適した発声発音法を会得すべきである。他人の模倣は正しくない。

日本の歌手が日本語で歌うのを聞いても日本語らしく聞えないで、歌詞がわからなかつたりするのは外国語の為の外国人の発声発音法を学んで、それを充分自分のものとして同化しないで模倣の域を脱しないからである。

さて声門を通り抜けた声は咽頭、口腔、鼻腔等の共鳴腔を通つて強調された声として外に出るのであるが、その共鳴腔の形が舌や唇によつて種々に変化されて、或は口音となり或は鼻音となり或は同じ口音でも、此処を通過する声の中に含まれる倍音中の或ものに制約を加える事に依り母音の色を決定したりする。以下再び口蓋・口吻の形状の相違に依る音色の違いについて前掲の「フランス語発音講話」から抄録する。

『P, 32

前述の如く声門の広度の相違が発声状態の相違を誘致したと同様に、口蓋・口吻等の形の相違は当然音色の相違を誘致する。同じ a, a を以て標記する音も、これを発音する人種の異なるにつれて感じを異にするのはそれが為である。此等の形の相違は、口蓋の彎曲度、齒列の彎曲度、口吻の傾斜度等に表われるが、口蓋の彎曲の深い者は声に深い響があり、比較的扁平な者は声に深味がない。また口蓋の彎曲の浅い者は齒列の彎曲が大き。大体日本人は口吻が突出して口蓋彎曲が浅く、したがつて母音音色の変化に乏しい。此れを横からX光線で見ると上下に短かく、左右に長い。歐人は比較的上下に長く、比較的左右に短い。』……………

歌唱の際の発声法と言うと「のど」の事ばかり考えやすいが上述の鷺尾氏の説を参考にして各自自分の共鳴腔の形状を自覚する事も何等かの効果をもたらすと思う。

前に声門を通つた声は共鳴腔（咽頭、口腔、鼻腔等）に依つて強調されると述べたが、之は口腔共鳴を充分利用する事に依つて為し得る。強い声を出す為に咽喉をしめるのがいけない事はわかり切つているが、声楽の先生は生徒に「口を開いて……」と言う注意を与える。「のどに力を入れないで」は良いが口は必要以上に開いてはいけない。口はその時に必要な母音、子音等の種類に応じ又前述の如く、高低、強弱、長短等の状況に応じて広くも、狭くも開けるべきものでいつも広く開けるべきではない。口を大きく開くと力の入れ所がなくなつてしまつて、いやでも咽喉に力はいはる。「のどに力を入れないで」と「口を大きく開いて」は両立しない。口

を大きく開いて拡声器の様に拡大させなくても、共鳴腔の利用に依つて充分声を強調する事が出来る。口は拡声器ではなく共鳴器である。

前述の「からたちの花」の歌唱の際の口の開き方を唇と唇との間の距離で発表したのが、猶考えなくてはならない事がある。普通口を広くと言う場合は唇間の距離だけではなく当然上下の門歯間の距離も考慮されるべきである。「あご」を動かす事以外に「唇」を動かす事に依つて音声に相当著しい変化を与える。第2図の「しろいしろい」の始めの方の「しろい」の「ろ」よりも「い」の方が唇間の距離が大きい様にグラフに表示されているが、歯間の距離の方は勿論「い」の方が狭いのである。日本語の発音に於ては唇の運動が少い。フランス語の母音が日本語よりずつと種類が多いにもかかわらず、例え小声で話しても明瞭に区別がわかるのは唇の活動が敏活だからである。日本語の母音の区別が聴いていてわかり難いのは唇の運動、特に上唇の運動に乏しいからである。口を余り開閉しなくても唇の運動に依つて母音の区別を明瞭にする事が出来る。日本の謡曲の発音は殊更に上唇の運動を制限する為に極めてあいまいな母音を聴かせて、之がその特徴となつている。正にフランス語の発音と正反対である。

次に万国音標文字の中、英独仏伊の諸国で使用されているものを掲げる。前にフランス語の母音の種類が多いと述べたが此の表で了承して頂けると思う。純粹の日本語の中にも使用されている同じ音には「日」と記し、相当差異が有るが音標文字中に稍々近似した音が有る場合には（日）と記す。

音標文字（英独仏伊で使用の分）

単母音					
a		仏	伊	（日）	Λ 英
a:	独				e 英 仏 伊（日）
d	独	仏		（日）	e: 独
d:	英				ə 英 独 （日）
ã		仏			ə: 英
ã:		仏			ε 独 仏 伊（日）
æ	英				e: 独 仏
					ẽ 仏

ē:			仏		
œ		独	仏		
œ:			仏		
œ̃			仏		
œ̃:			仏		
i	英	独	仏	伊	日
i:	英	独	仏		
y			仏		
y:		独	仏		
ī		独			
o	英	独	仏	伊	
o:	英		仏		
o	英		仏	伊(日)	
o:		独	仏		
ō			仏		
ō:			仏		
ø			仏		
ø:		独	仏		
u	英	独	仏	伊(日)	
u:	英	独	仏		
ū		独			

重母音(日)は多いので省く。

ai		独			
ai	英			伊	
au		独			
au	英			伊	
ae				伊	
ea				伊	
ei	英			伊	
eo				伊	
eu				伊	
εə	英				
ia				伊	

ie					伊
io					伊
iu					伊
iə	英				
oa					伊
oe					伊
oi					伊
ou	英				伊
ɔi	英				
ɔə	英				
ɔy		独			
ua					伊
ue					伊
ui					伊
uo					伊
uə	英				
iai					伊
iei					伊
ioi					伊
uai					伊
uei					伊
uoi					伊

半母音

j	英	独	仏		日
ɟ			仏		
w	英	独	仏		日
ɣ		独			
y		独			

子音

l. 破裂音

a) 唇音

p	英	独	仏	伊	日
b	英	独	仏	伊	日

b) 齒音				
t	英	独	仏	伊 日
d	英	独	仏	伊 日
θ	英			
ð	英			
c) 口蓋音				
k	英	独	仏	伊 日
kv		独		
g	英	独	伊	伊 日
2. 摩擦音				
a) 唇音				
f	英	独	仏	伊 (日)
v	英	独	仏	伊
b) 齒音				
s	英	独	仏	伊 日
ʃ	英	独	仏	日
ʒ	英	独	仏	日
z	英		仏	伊 日
c) 口蓋音				
ç		独		

x		独		
d) 氣息音				
h	英	独		日
3. 鼻音				
m	英	独	仏	伊 日
n	英	独	仏	伊 日
ŋ	英	独		日
ʝ			仏	伊
4. 流音、側音、震動音				
l	英	独	仏	伊 (日)
r	英	独	仏	伊 (日)
R			仏	
ʀ			仏	
5. 複子音				
ts	英	独		日
tʃ	英	独		日
pf		独		
ks		独		
dʒ	英			日
ʎi	(リとイの中間音)		伊	

上記の表に依つて、フランス語の母音の多いこと。イタリア語の重母音の多いこと。その他特徴がわかる一面、日本語を之と比較する事に依り日本語の特徴も知る事が出来る。

猶日本語を発音する際にただ単音を発音するだけでなく「一連の音」から出来ている「語」としての発音、更に「文」としての発音などに就いても述べるべきであるが、今回は単音の発音に重点を置いて述べたので、それ等については別の機会にゆずる事にする。

IV 結 論

以上述べた事は「意見」であつて「研究」では無いと言う批評を受けるかも知れないが、此の文を読まれた方が之を契機として個々に最も自分に

適した方法を「研究」される事がのぞましい。「母音の音色は何によつて決定されるか」「発音の際の口の開き方に差異の生じる理由」「共鳴腔の形状の入種的差異及び個人的差異」等種々雑多の事を述べたが、結局、結論は「外国語の歌曲を歌うのと同じ方法で日本語の歌を歌つてはいけない。日本語の特質を良く研究して歌唱すべきである」と言う事に帰する。

参 考 文 献

- | | | | |
|---------------|-------------|------|----------|
| 1. 岡倉由三郎 | 発音学講話 | 明治35 | 宝永館 |
| 2. オネスト・プレトネル | 実用英仏独露語の発音 | 大正15 | 同文館 |
| 3. 鷺尾 猛 | 仏蘭西語発音講話 | 昭和10 | 大学書林 |
| 4. 橋本進吉 | 古代国語の音韻について | 昭和17 | 明世堂 |
| 5. 岩淵悦太郎 | 国語概説 | 昭和23 | 学芸図書株式会社 |
| 6. 清水 脩 | 日本リード曲選 | 昭和25 | 音楽之友社 |
| 7. 金田一京助 | 国語の変遷 | 昭和27 | 創元社 |

Mizutani, Tomohisa

The Pronunciation for singing Japanese Art Song.

Résumé

Japanese art song should not be sung in the same way as foreign one should be. It is important to understand the specific character of Japanese language. For instance, as for a vowel "A", it should be pronounced in various different shapes of mouth according to the respective situation.